

# 官営企業における温情主義の検討

——富岡製糸場を中心に——

鈴木 忍

はじめに

1. 温情主義と恩情主義
2. 明治維新政府の課題
3. 日本的経営の研究
4. 富岡製糸場の役割
5. 富岡製糸場入場
6. 六工社
7. 青木てる  
おわりに

## はじめに

本稿では明治維新当時の日本的経営の特徴を検討する。その根底には日本的経営に関して温情主義が指摘されることが多い。また温情主義は経営家族主義との関わりで論じられている。日本的経営の特徴を考察するに際して、まずわが国産業社会の発端である明治維新にさかのぼるのが適当と考える。もちろん経営は社会的側面を強く備えているため文化的・社会的・歴史的観点からの考察は不可欠である。その点、明治維新最初の近代工場の走りといえる富岡製糸場における工女の検討は、工女の処遇を含めて当時の時代背景を知るうえでも重要である。とりわけここでは工女の寄宿舎における生活環境をとおして温情的な側面を検討する。

## 1. 温情主義と恩情主義

まず本稿のテーマである温情主義と恩情主義の違いについて確認しておく。

間宏氏によれば「温情主義（筆者は paternalism の訳語として温情主義を用いる）とは、資本家・経営者が、自己の雇用者に対し、下からの権利としての要求や外部からの義務としての強制によらず自ら進んで、被用者の生活に好意的な配慮（注：資本家・経営者自身が主観的にそう考えているのであって、被用者にとっては迷惑な場合もありうる）を加えようとする態度をいう。したがってこの温情主義のあり方には、労使の社会的距離，社会的勢力の差異，企業外的諸条件の相違によって種々な類型があらわれてくる。ただ、いずれにしても、企業における温情主義は、労使間の経済力（＝富力）の差が前提になっている。」<sup>(1)</sup>

広辞苑によれば、恩情主義は、例えば「師の恩情に報いる」などのように用いられるのに対して、温情主義は恩情主義よりも広義に捉えられているように思える。上記のように温情主義は上司が部下に対する好意的な態度のように捉えられているが、部下同士においても双方の思いやりの中にあらわれている。

ここでは、温情主義を資本家や経営者が上からの目線で被用者の生活に好意的に配慮すると捉えるだけではなく、被用者同士の思いやりの態度を温情主義の背景にあるものとする。もちろんこうした温情主義的な行為は当事者を取りまく家族関係とも深く関わっている。というのは、温情的態度は温情を受ける側にも受け入れる条件が備わっているものと考えられるからである。それは温情的感情を与える側と受け入れる側に相互の理解が不可欠だからである。その点、和田英「富岡日記」<sup>(2)</sup>には工女部屋の様子や家族関係について詳細に記されている。

こうした観点からすると、間氏による労使間の経済力の差を前提とした温情主義の捉え方に対し、温情的態度を与える側と受け入れる側の側面を含めて考察していくことも当時の事情を知るうえで必要であると考ええる。

さて、工女の処遇に関しては、寄宿舎での生活環境が重要であるが、工女の寄宿舎に関する記述や建造物などはほとんど残されていない。おそらく富岡製糸場に唯一残されているのではないだろうか。富岡製糸場に関しては、和田英（旧姓横田英）による「富岡日記」に比較的詳細に示されているので以下に紹

介していくことにする。

## 2. 明治維新政府の課題

周知のとおり、明治維新当時の企業は富国強兵のために殖産興業へと急速な取り組みがなされた時代であった。そのため主要な産業は官営により政府主導ですすめることになった。先進的な欧米列強に追いつくという至上命令を達成するための努力がなされることになる。維新早々の混沌とした時代にあって、わが国は欧米列強と対等に戦うためにはあまりにも弱小国であった。何よりも富国強兵が急がれたのである。

富国強兵のためには資金が求められるが、資金調達の原因力になったのが製糸工業であった。しかし、当時の日本企業は多くが家内工業のレベルで、いわゆる座繰りでは品質に斑があり、粗製濫造という問題があった。欧米の需要を満たすには品質向上が求められた。富国強兵を達成するにははるかに力量不足であった。それにもかかわらず、わが国の外貨獲得のための重要な産業は米や茶と製糸業以外には考えられなかった。とくに製糸業にいたっては主要供給国であったヨーロッパや中国が需要を満たせない事情にあったため、わが国に関心が高まったのである。

この欧米列強国に対する力量不足を補うために、ヨーロッパから先進技術の導入が急がれた。当時の製糸業はイタリアやフランスにおける当時の世界的製糸産業において繭が細菌によって侵され供給が途絶えていた。そのため欧米は需要を満たすべく、日本の製糸業に目をつけた。明治政府としてはヨーロッパの器械製糸技術を導入して粗製濫造という汚名を一刻も早く返上しようとしたのである。富岡製糸場はその代表的な企業の一つである。

とりわけ製糸業はわが国の伝統的な産業の一つであることと、ヨーロッパでは繭が細菌に侵されたため養蚕業が壊滅的なダメージを被っており、中国でも製糸産業不振のため不足がちな絹の貿易に力を入れたのである。

こうした時期が重なり、わが国の殖産興業の担い手として製糸業の近代化に

白羽の矢が立った。その検討の開始は明治3年であるが、明治5年には創業を開始するという驚異的な速さであった。当時のわが国の事情からすれば、先進国としてのフランスからの技術導入にあたって、ブリュナら一行は工場建設にあたりわが国の土壌・風土に適した立地に重きを置いて設計している。そして作業場は日本人の体形に合うよう工夫がなされたことは注目に値する。創業が明治5年であることから明治政府がいかに製糸産業の近代化が重大かつ緊急の課題であったことがうかがえる。

新政府としては、維新後の内乱（戊辰戦争、西南戦争など）に対する失費が嵩む中で、富国強兵を達成するには大変な判断を迫られていたわけである。そんな中で、富岡製糸場のようなこれまでに経験したことのない近代工場の建設に対する決断を下したことは勇気のいることであつたらう。まして、その工場が単に目先の利益を優先するのではなく、ここで育った工女が日本中の製糸業発展の礎となることが期待されていたのである。

このように富岡製糸場は製糸場の採算性はもとより、本来の目的は地方に器械製糸場を設けて、その指導者としての工女を育成することにあつた。募集はわが国全土に及んだが、その大半は氏族の出身であつた。和田英（旧姓横田）は後述するように富岡製糸場を模した工場「六工社」（ろっこう社）に入りそこで指導にあたることになっている。六工社については、後述する。

さて、混沌とした世の中でこのような大事業を成し遂げたことは、製糸業が富国強兵のための殖産興業としていかに有望分野であつたかがしのばれる。和田英による「富岡日記」<sup>(3)</sup>においても、遅れて入場してきた山口の工女に対する優遇処置への不満が随所に示されていることからその混沌さが了解できる。つまり、薩長に対して一目置くという態度である。

### 3. 日本的経営の研究

さて、アベグレンによる「日本の経営」<sup>(4)</sup>以来、日本的経営に関する研究が盛んに行われてきた。なかでも日本的経営を理解するためには伝統や文化と

いった日本的経営の背景に深く存在している部分の研究が盛んであった。

本稿では、わが国最初の近代的工場である富岡製糸場の工女が取り組む姿勢を中心に、温情主義の関係を検討する。わが国における近代的工場の走りとしての富岡製糸場は富国強兵の重要な担い手となる優秀な工女の育成の場であり、工場制工場の手本となるべき工場であった。

こうした工場の運営に当たり、わが国に伝統的な温情主義的配慮が工業化への原動力となったと考えられる。この温情主義は経営家族主義や終身雇用とも深く関係しており、それがまた日本的経営の原理を形成し、企業の強さの原動力となってきたと考えられる。

日本的経営の社会学的観点からすれば、制度と機能の面から検討を要するであろう。制度面からは温情主義を原点として長幼の序という伝統が大きく関わっている。それが経営家族主義となる。また機能面からすると長期的な雇用関係、つまり終身雇用と深く関係するであろう。

このように、わが国の経営の社会的側面からすると、終身雇用が第二次大戦後の廃墟となした国土復興の機動力となったことは確かであろう。そして、その後好景気と不景気が繰り返されると、好景気では終身雇用に対する賛美論が持つて囃され、不景気になると終身雇用が糾弾されるという事態は、終身雇用を理解していないことから生じた結果であるといわざるをえない。つまり、景気によって日本的経営にたいする賛否両論が繰り返されているということは、日本的側面が強く影響しているといわざるを得ない。

以上のように、日本的経営の根幹をなす終身雇用を温情主義の観点から、とりわけ富岡製糸場における横田英（後の和田英）の日記を手掛かりに検討を加えることにする。この日記は数冊出版されているが、それぞれに注釈があり大いに参考になる。

#### 4. 富岡製糸場の役割

江戸時代が終焉を迎えた明治維新当時、わが国は欧米列強国に軍事や経済力

に遠く及ばず、富国強兵が緊急の課題であった。そのためには殖産興業が叫ばれるのだが、封建時代の手工的な産業では品質に斑があったため、品質の高い欧米の近代工業に追いつく必要があった。そこでまず伝統的な産業である米、茶、絹、特に製糸業の強化を図ることになる。

当時、欧米では絹の需要が高かったが、産地のイタリアやフランスで繭の細菌による影響で供給不足に陥っていた。同時に主要な産地である中国でも製糸産業の不振が続いていた。そんな中、座繰りによって行われていた製糸業であったが、ヨーロッパ諸国が日本の製糸産業に目をつけた。しかし、日本の伝統的な産業である製糸産業は座繰りによる家内制工業の域を出ず、品質に斑があった。こうした産業分野を強化するためにヨーロッパの器械製糸の導入に力を入れることになった。こうして、わが国の富国強兵の担い手として製糸産業が期待を担っていたのは好タイミングであった。

そもそも富岡製糸場設立の目的は、座繰りによる粗製濫造を改め、ヨーロッパからの製糸器械を導入し、量産かつ質の均一化を推進することになった。そして、富岡製糸場の本来の役割は、器械製糸に慣れた工女を育成し指導的な工女として育成することであった。

富岡製糸場はわが国における近代的工場の第一号である。この工場は渋沢栄一の指導の下、渋沢の妹の夫である尾高敦忠を初代の工場長とし、フランス人のブリュナを始め10数名の女工や技術者を雇って始められた。維新聞もない、混沌とした時代に封建時代から急速に近代的な工場である富岡製糸場への募集が開始されるが、中心となっていたのがブリュナをはじめ10数名のフランス人であったため、彼らのワインを常飲する習慣から「血をとられるの油をしぼられるの」<sup>(5)</sup>と評判になって、工女の募集が捗らなかつたようである。

そのうちに初代場長の尾高敦忠の娘を出すことにして、ようやく応募者が現れるようになる。和田英の場合も同様に、フランス人に対する評判が立って、応募者が現れなかつた。和田英(旧姓横田)の父は信州松代藩の藩士横田数馬であった。父は明治6年頃、松代の区長をしていて、1区につき何人(確か1区につき16人)13歳より25歳までの女子を富岡製糸場へ出すべしと申す県

庁からの達しがあった。<sup>(6)</sup>

しかし、相変わらず応募者は現れない。中には「区長のところに丁度年頃の娘が有るのに出さぬのが何よりの証拠だ」<sup>(7)</sup>というようになり、それで父も決心して私（和田英）を出すことに致しました。そうこうしていると、河原鶴子（当時13歳）が「お英さんがおいでなら私もぜひ行きたい」といい、父からお許しが出た。「鶴子さんの父君は北越戦争の時松代藩より出陣の折、総大将で若松城に乗り込んだ方であります。」<sup>(8)</sup>こうなると不思議なもので、親類、友達などわれもわれもと16名になった。

明治6年2月26日一行16名は松代を出立することになる。その時の人名は次のとおりである。<sup>(9)</sup>

河原 均	次女	河原鶴子	13歳
金井好次郎	妹	金井新子	14歳
和田盛治	姉	和田初子	25歳
酒井金太郎	長女	酒井民子	17歳
米山友次郎	妹	米山嶋子	18歳
坂西 某	次女	坂西滝子	15歳
長谷川藤左衛門	長女	長谷川淳子	15歳
宮坂 某	未来之妻	宮坂しな子	14歳
小林石左衛門	長女	小林高子	21歳
同	次女	同 秋子	16歳
小林 某	長女	小林岩子	18歳
福井友吉	長女	福井亀子	18歳
塚田長作	長女	塚田栄子	17歳
東井 某	次女	東井留子	21歳
春日喜作	次女	春日蝶子	17歳
横田数馬	次女	横田英子	17歳

(以上16名)

いよいよ出立間近に英の父から、「さてこの度国の為にその方を富岡製糸場

へ遣わずに付けては、能く身を慎み、国の名家の名を落とさぬように心を用いるよう、入場後は諸事心を尽くして習い、他日この地に製糸上出来の節差支えこれ無きよう覚え候よう、仮初にも業を怠るようのことなすまじく、一心にはげみますよう気を付くべく」<sup>(10)</sup>と念を押されている。

また、河原鶴子の父は北越戦争の勇士であり、和田英の父は松代の名士であった。ともに維新を戦った時の人であった。その娘を率先して富岡へ送るということになれば、近隣からの応募者が増えるのは当然と思える。その後、応募者があったが、満員ということで取り下げられている。

わが国の製糸産業に白羽の矢が立ったのは、横浜の貿易港が賑わいを見せ始めたころ、家内工業で生産していた製糸は粗製濫造という問題に直面していた。この品質競争に打ち勝つためには、ヨーロッパからの技術導入が欠かせなかったのである。

当時は、この器械製糸工場により、より品質の高い製品を安定的に供給できる工場の建設が望まれた。それが富岡製糸場であった。富岡製糸場の操業は明治3年に提案され、明治5年には創業するという速さであった。それには、フランスから呼んだブリュナら一行の好意的態度が大いに貢献している。ブリュナらの貢献により、短期間に適切な立地の検討から明治5年という短期間での操業を果たした。

彼らは、ヨーロッパの生産設備を極力日本の気候風土に適したものにする工夫を怠らなかった。セメントがなかったので漆喰で補ったり、レンガを瓦職人に委ねるなど、またテーブルの高さも日本人の体形に合ったサイズや高さに工夫を凝らしている。ブリュナらの日本に製糸場を設けるための配慮は建物や什器はいうに及ばず、いたるところに配慮がなされている点が、後の民営化において昭和初期まで稼働を続ける要因となったのであろう。

## 5. 富岡製糸場入場

和田英らは明治6年2月に富岡製糸場へ出発することになる。松代を出発し

て、ようやく富岡製糸場の御門前に参ったときの感想を次のように述べている。「実に夢かと思うほど驚きました。生まれまして煉瓦造りの建物など稀に錦絵位で見ればかり、それを目前に見ますことでありますから無理もなきことと存じます。それから一同御役所へ通されました。その後工女部屋へ通され「私どもは人ずれぬようだからと総取締青木だい子様の隣室に置くと申し渡されまして、河原鶴子、金子新子、和田初子、春日蝶子と私の5人が一緒にいました。6畳敷に6尺の押入れ2カ所、なかなか込み合いますから4人に致すようと申されましたが、何れも放すわけには参りません、皆いやだと申しますからそのように申しましたら、それではそのまま宜しいと申されました。」<sup>(11)</sup>

富岡製糸場のように、新政府の官営企業という厳しい決まりによって指導されているように考えるが、場長の尾高敦忠は、工女の不満を和らげるためいろいろと配慮している。和田英が総取締青木だいとあるのは、青木てるの間違いである。青木てるについては後述する。

そのうち「段々暑気が強くなりますに従いまして、病人が沢山出来てまいりました、洋医の申しますには大勢部屋に閉じ込めて置くから病気になるのだ。夕方から夜8時半頃迄、広庭に出して運動させる様にと申しましたとの事で、毎夕広庭に出まして遊ぶことになりました。役人・取締が付添まして夜9時頃迄遊びます。」<sup>(12)</sup>

製糸場にはフランス人の医師が雇われ、製糸場で働く人達の怪我や病気の治療にあたっていた。明治3年に政府とブリュナとの間に取り交わした雇用契約書（条約書）の第8条には、「職人等不快ノ節、服薬料ハ繰糸場ノ入用タルベシ、若シ病氣ニテ働キ方出来ザル者ハ帰国セシム」<sup>(13)</sup>とあるので、ここでの職人等はフランス人を指している。

医師の雇用については、ブリュナに権限が委譲されていて、医師手当はブリュナ支払となっていた。フランス人の雇用期間である明治8年12月迄の間、3人のフランス人医師が交代している。重い病気については入院できる施設として、明治6年に病院建設の許可が下りた。

病院は、梁16間、奥行3間半の病院が建てられた。病室は押入れ付きの6

畳間が8室、便所が4か所もあって病院としての機能は充実していた。なお、8年頃の記録によると、フランス人医師が帰国した後は日本人医師がその役目を果たしていた。当時としては非常に整った環境であった。

入場してから間もなく、河原鶴子が不快を訴え、その日は部屋で休んでいましたが、「急に足がひよろひよろすると申されましたから、翌朝病院に参られましてしんさつを受けられますと、かつ氣だとのことで、その日から足が立たぬ様に成られましたから、直ちに入院致されましたが、追々様子が宜しくありません。」<sup>(13)</sup>

鶴子を国に帰したいと部屋長のところへ懇願しに行くのだが、帰国せずとも決して命に別状はないといわれてあきらめる。「しかし段々に様子が宜しくない。食事が進まず、足が立たないため、はばかりにも私が肩にかけてようよう連れて参りまして、子供に手水を致す様に後から抱いて居るのでありますが、何分私も年弱の17歳、力もありません、中々骨が折れましたが、一生懸命でありますから格別苦労だとも思いませんで、一日も早く全快致しますよう、朝夕信心をして居りました。只今のように便器でもありますと病む人も看病致す私どもの様に楽でありましたろう。大小用の度毎にたがいに骨が折れましたが、それは未だ宜しゅう御座りますが、病人の食事は病室へ参りますが、私は自分の部屋三度三度に参らなければなりません。病院は工女部屋の東の端の向こうにあります。私の部屋は西の端に有りますから75間と10間余り、丁度85間余りの所を往復致さなければなりません。」<sup>(14)</sup>

「日数も段々立ちまして3カ月近く成りまして、少しは快く成られまして湯殿迄おんぶして参り、私も共々はだかに成りまして抱いて入るのであります。友だちがのぞきまして笑いましたが、私は笑う所ではありません。」このような事情を知った尾高様、青木様なども横田（和田英の旧姓）ばかり長々看病させては気の毒だから同行の中で変わり変わりに看病致しますようと申されました時の私の喜びはどのようでありましたらう。」<sup>(15)</sup>

こうしてみると、当時としては医師及び病室の完備などすぐれた製糸場であった。また、場長の尾高氏、女性の総取締青木氏らを見る限り、懸命に仲間

の看病をしていた横田英ばかりに看病させるのではなく、交代で看病するように指導している点で部下に対する心優しさがうかがえる。

以上のように医師や病室の完備や健康維持の為に広場で体を動かすなど、温情的な配慮は、封建時代から連綿と続く日本人の気質なのではなかろうか。であれば、今日においても深く根付いていると考えるのは当然であろう。

## 6. 六工社

和田英らが富岡製糸場で学んだ技術を生かすべく、六工社の操業への準備が整ってきた。六工社はいわば手作りの器械製糸工場であった。創業者らが総力でつくり上げた工場である。富岡製糸場を手本に、限られた予算の中で創意工夫によって操業にこぎつけたのである。

蒸気器械発明に貢献した人として、大里忠一郎氏、海沼房太郎氏があげられている。大里氏は、「以前汽船に居られましたところから、力を多く蒸気元釜から大管を通して小管（パイプ）に渡ります方を受け持って居られましたように承ります。海沼氏は小管（パイプ）即ち煮釜繰釜に蒸気の通います所のネジの付け方、また器械全部皆指図されたのであります。」<sup>(16)</sup>

第3に苦心したのは横田文太郎であった。「これは元松代藩御鉄砲鍛冶を務めた人で、・・・図もなく形もなくただ手真似と口ばかりですることを仕上げますその苦心は、どのくらいでありましたろう。」<sup>(17)</sup>

第4は湯本宇吉である。「この人は元松代藩の御槍の柄をこきます御槍師を務めました人であります。実に指物は名人であります。この人が大車・小車・ゼンマイ等全部致しましたのであります。」<sup>(18)</sup> いずれにしても、図もなく、形もない中で工夫に工夫を重ねて完成させるのであるからその苦勞がしのばれる。

第5に与作と申す大工の棟梁である。「これは別に苦心致したと申すほどではありませぬが、何分これまで立てたこともない形の建築でありますから、当人に取りましていかに苦心致したことでありましよう。」<sup>(19)</sup>

いずれにしても、未経験な工場を建設するのであるから、その苦労は大変なものであった。たとえば、レンガにしても近郊の瓦職人に頼んで作らせるのであるが、そこでもやはり試行の連続であった。またレンガを落ち着かせるためのセメントがないため、漆喰を用いるなどの工夫がなされている。

明治維新当時の人々の意識は、富国強兵であったから、国が進める施策に対してお国のためという強い連帯感があった。もちろんそれは同時に「家の恥にならぬ様に」立派にお役にたつようと氏族の娘たちが工女として成長して郷里に帰ってくることを期待している。

## 7. 青木てる

和田英が「富岡日記」で触れている工女取締の青木だいは、青木てるの誤りであると森まゆみ氏が解説の中で指摘している。青木てるは、和田英ら一行が富岡製糸場に入場する以前（明治5年）に入場していた。

明治5年7月武州郡小川村（現埼玉県比企郡小川町）の青木伝次郎家の庭先に総勢25名の若い娘たちが集まっていた。青木てるは伝次郎の母である。青木家は土地の名家でてるは初代場長である尾高惇忠氏の懇願により以下のとおり、青木てるを筆頭に総勢25名が明治5年7月に入所した。

和田英らが入場した時には、青木てるは総取締役として重職の地位にあった。青木てるは武州小川村の出で、旧名主青木伝次郎の母である。てる一団が明治5年に富岡製糸場へ向かうに当たり、初代場長である尾高敦忠の工女を求める叫びにも似た一通の手紙がきっかけであった。

青木てるについては、小川町町史の編纂に携わっていた新田文子氏による「青木てる物語」（2014）を参考に紹介する。<sup>(20)</sup>

さて、初代場長尾高は、工女募集に苦慮しており、その背景には有力な協力者であるブリュナをはじめフランス人の工女や技術者の生活習慣が、当時フランス人は「若い女工の油をしぼり、血を飲む」などの風評が広がり、工女募集に支障をきたしていた。

そもそも富岡製糸場は、渋沢栄一が「將軍の名代としてパリ万国博覧会に列席する 15 代將軍の弟昭武の随行員として、慶応 3 年（1867）にフランスを訪問している。」<sup>(21)</sup> 当時 28 歳であった栄一は、博覧会視察後にフランスの製糸工場をつぶさに見学している。

「帰国後、伊藤博文から声をかけられた渋沢は、ヨーロッパ視察での見聞から、良質な生糸を大量に生産するには、国がまず製糸場を建設すること、諸外国、特にフランスの先進的な器械製糸技術の導入が必要であることを進言した。」<sup>(22)</sup>

こうしたことから、新政府による富国強兵のための殖産興業へ邁進するきっかけを与えることになる。当時のわが国の産業は生糸、茶、米くらいで、そのいずれも旧態依然で競争力に欠ける。

尾高敦忠が富岡製糸場の初代場長となったのは、渋沢栄一との関係が深く関わっている。というのは、渋沢栄一の妻千代は、尾高敦忠の妹であるところから理解されよう。また栄一が少年時代に尾高敦忠の開く尾高塾の塾生として本格的に陽明学を学んでいる。こうした関係で尾高が富岡製糸場と深い関係にあったことが分かる。

さて、取締青木てるは、尾高から悲痛にも思える 1 通の手紙がきっかけとなった。明治 5 年 7 月にてるが中心になって、総勢 30 名が工女目指して青木伝次郎の庭先に集まっていた。場所は武州比企郡小川村（現在の比企郡小川町）であった。てるは青木伝次郎の母である。初老のてるが 25 名の 15 歳から 25 歳までの若い娘を集めるのは大変な苦労があったと思われる。この日を迎えたてるは胸をなでおろしたことであろう。青木てるは富岡製糸場への出発当時 59 歳であった。

尾高淳忠場長にしてみれば、よくない風評がたって募集活動が捗らなかった時だけにてる一行が富岡製糸場に到着した時の喜びは大きかった。その後てるは取締に任ぜられて、翌年和田英ら一行の面倒を見ることになる。

のちに尾高敦忠は、明治 6 年 6 月に画家白鷗が富岡製糸場で描いたてるの肖像画をてるに贈っている。富岡製糸場は、官営であったから全国へ工女募集を

行っていたが、それでも300人の工女を集めることは困難を極めた。そこへて一行が早々に到着したことは尾高敦忠にとって大変ありがたかったであろう。

後に初老のてるが取締を仰せつかり、翌年に到着した横田英一行の面倒を見ることになる。ここでも横田らのわがままを聞き入れている様子うかがえる。とくに横田らが入場して取締のてる（日記にはだいとあるが英の記憶違いである）の指導の下「私どもは人すれぬようだからと取締青木だい子様の隣室ニ置くと申し渡されまして、河原鶴子、金井新子、和田初子、春日蝶子と私と五人一所に居ました。六畳敷に六尺の押入レニカ所、中々込み合いますから四人に致す様と申されましたが、何れもはなす訳に参りません。皆いやだと申しますから其様ニ申しましたら、それでは其のままで宜しいと申されました。其他の人々も近き所に三人四人と部屋が決まりました。」<sup>(23)</sup>

このように、尾高敦忠と青木てるとの関係や青木てると横田英らの関係から、温情的な関係がうかがえる。それは個人的な温情的な関係にとどまらず、富岡製糸場の組織風土といえるものであった。たとえば、当時として工場内に医療施設を置き、工女の健康に留意していることや健康管理に気を遣っている点など温情的であるといえよう。

## おわりに

これまでに工女の宿舎の実態を調べてきたが、工場跡はかろうじて残っていた。しかしその周辺または工場内にあった工女の宿舎跡はほとんど残っていない。その点、富岡製糸場では、和田英（旧姓：横田）による富岡日記では工女たちの生活までの記録に残しているので貴重な資料である。

この資料の中には、膨大な図面も残っており<sup>(24)</sup>、当時の様子が理解しやすい。今回は図面や写真は全く載せていないが、富岡製糸場へ行けば図面集が市販されているのは貴重である。ところで、明治維新早々に稼働し始めた富岡製糸場での工女を中心にみてきたわけだが、和田英の「富岡日記」は彼女の記憶

に基づいたものであったため、文章が読みにくかったり、名前に間違いがあったりしたが、資料として重要な役割を担っていると確信する。

本来富岡製糸場はわが国の富国強兵を支える殖産興業の中心的な担い手として国策として展開したものである。そこでは、300人の工女を募集して、訓練を積み、それぞれの地方で活躍する人材の育成を図っていた。

もちろん伝統的な座繰りによる製糸もあったが、質が一定でなかったために欧米の要請にそぐわない。そのため急遽イタリアやフランスから製糸器械を導入して質の安定化を図らなければならなかった。横田英らは六工社の準備を進めていたので、富岡製糸場に入場して1年後には六工社で働くことになっていた。

こうしたいわば混沌とした時代であれば、官僚主義的なトップダウン型の管理システムが当然視されるが、今回和田英による「富岡日記」によれば、和田英と家族の関係においても「家の恥にならぬよう」心してやりなさい、と心構えを確認している。

また、山口県からきた工女たちの行為に対する不満を述べているが、当時の時勢からいって薩摩および長州に一目置くというのは当然であったろう。これ以外の点で「富岡日記」は恩情に満ちているように思えた。

和田英より一足先に富岡製紙場入りした青木てる一行においても、てるは高齢にもかかわらず、率先して工女を集め尾高場長の要請に応えた。のちにてるは取締に任ぜられ、2年間職務を全うしている。

青木てる一行の氏名は次のとおりである。<sup>(25)</sup>

青木てる	小川村	59歳
青木敬	小川村	17歳
早津作	小川村	49歳
早津台	小川村	17歳
轟と称	小川村	19歳
関口美津	小川村	45歳
前田増	小川村	53歳
岸野しい	小川村	18歳

森村 時	小川村	25 歳
森村 春	小川村	20 歳
笠間 登	小川村	18 歳
原 い和	青山村	20 歳
恩田うし	青山村	16 歳
鳥羽 兼	青山村	20 歳
福島 松	大塚村	18 歳
江守八重	大塚村	20 歳
清水 袖	木部村	25 歳
清水喜代	木部村	16 歳
清水 沢	木部村	18 歳
清水 基	木部村	16 歳
清水 秋	木部村	17 歳
吉田 貞	勝呂村	14 歳
田畑 霜	勝呂村	18 歳
鈴木 米	奈良梨村	17 歳
峰岸春以	腰越村	17 歳

(以上 25 名)

てるは、明治7年孫娘の敬を伴って、富岡を去る。横田英ら一行がそうであったように、青木てるも製糸場が仕立てた人力車で小川に戻った。てる61歳の帰郷であった。てるは富岡から戻った2年後の明治10年(1877)に63歳で永眠している。<sup>(26)</sup>

和田英らと同様に、富岡製糸場での訓練は1~2年という短期であるが、時代の要求とあってのんびり教育している時間がないのであるから、1~2年後には郷里に戻って指導にあたらなければならない。

和田英らの後から入場してきた山口からの一行とちょっとしたもめごとがあったが、それ以外には大きな問題がなく、富岡製糸場の環境は工女にとって快適であったことが伝えられている。

## 【参考文献】

- [1] 今井幹夫編 和田英著「富岡日記」群馬県文化事業振興会, 平成 19 年
- [2] 和田英「富岡日記」中央文庫, 昭和 53 年
- [3] 和田英「富岡日記」上毛新聞社, 昭和 48 年
- [4] 和田英 森まゆみ解説「富岡日記」みすず書房, 平成 23 年  
以上の内容はほぼ同じであるが, 編者によって注釈があって参考になる.
- [5] 新田文子「青木てる物語」  
新田氏は小川町の町史編纂にかかわり, 小川町から富岡製糸場への工女に関する内容に詳しい. とくに, 総取締の青木たいは, 青木てるの記憶違いとの指摘がある.
- [6] 犬丸義一校訂 職工事情 岩波書店 1998 上
- [7] 間 宏 日本労務管理史研究 お茶の水書房 1978
- [8] 財団法人文化財建造物保存技術協会編「旧富岡製糸場建造物群調査報告書」富岡市教育委員会, 白峰社, 平成 20 年 2 版
- [9] 今井幹夫「富岡製糸場の歴史と文化」みやま文庫, 平成 18 年

## 【注】

- (1) 間宏著, 「日本労務管理史研究」お茶の水書房 1978
- (2) 今井幹夫編, 和田英著「富岡日記」群馬県文化事業振興会
- (3) 今井編, 前掲書, 51 頁
- (4) J. アベグレン著, 占部都美訳「日本の経営」ダイヤモンド社, 1964
- (5) 今井幹夫編, 前掲書, 4 頁
- (6) 今井幹夫編, 前掲書, 4 頁
- (7) 今井幹夫編, 前掲書, 5 頁
- (8) 今井幹夫編, 前掲書, 21 頁
- (9) 今井幹夫編, 前掲書, 16-17 頁
- (10) 今井幹夫編, 前掲書, 21 頁
- (11) 今井幹夫編, 前掲書, 33 頁
- (12) 今井幹夫編, 前掲書, 90 頁
- (13) 今井幹夫編, 前掲書, 92 頁
- (14) 和田英「富岡日記」中央文庫, 46 頁
- (15) 今井幹夫編, 前掲書, 95 頁
- (16) 和田英「富岡日記」中央文庫, 昭和 53 年, 91 頁
- (17) 和田英, 中央文庫, 92-93 頁
- (18) 和田英, 中央文庫, 93 頁
- (19) 和田英, 中央文庫, 93 頁
- (20) 新田文子, 「青木てる物語」平成 26 年, 朝日印刷工業
- (21) 新田文子, 前掲書, 26 頁
- (22) 新田文子, 前掲書, 26 頁
- (23) 和田英, 中央文庫, 前掲書, 20 頁

- (24) 財団法人文化財建造物保存技術協会編「旧富岡製糸場建造物群調査報告書」富岡市教育委員会, 白峰社, 平成 20 年 2 版
- (25) 新田文子, 前掲書, 53 頁
- (26) 新田文子, 前掲書, 44 頁

A Study of the paternalism in the government control company  
On the Tomioka Silk Mill  
Shinobu Suzuki

In this paper, I will examine the way in which female will workers especially at the Tomioka Silk Mill after Meiji revolution exemplify this paternalism.

温情主義は日本的経営の要諦をなすものとして知られている。本稿ではこの点を維新後の工女, とくに富岡製糸場においてよく表れているものと考え, 再確認しようとするものである。